



TITLE:

戦時華北通貨工作史論(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

桑野, 仁

CITATION:

桑野, 仁. 戦時華北通貨工作史論. 京都大学, 1964, 経済学博士

ISSUE DATE:

1964-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211234>

RIGHT:

【11】

氏 名	桑 野 仁 くわ の ひろし
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 2 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	戦時華北通貨工作史論

論文調査委員 (主 査) 教授 穂積文雄 教授 中谷 實 教授 松井 清

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、序論より結論に至るおよそ15章および付論、490字詰、309ページ、約3,8000字より成る。

まず第1章序論においては全体の結構、概要を述べ、第2章においては、日中戦争開始直前の軍事・政治・経済情勢を略述、ついで、第3章以下第6章において華北通貨戦争の展開を取り扱い、第7章第8章においては華中における通貨問題を、第9章においては解放区における通貨問題をそれぞれ究明、第10章に至り太平洋戦争突入後租界占領による金融統制強化・儲備券の法幣攻撃・華北インフレーションの複雑な問題と取り組み、第11章においては大凶作下における通貨戦において展開する最原始的な食糧争奪戦の情勢を追究、第12章においては日本の収奪が農村住民・都市労働者・土着産業に及ぼす影響を考察、第13章においては占領地通貨制度の終末を敍し、第14章においては連銀券インフレーションの諸特徴をマルク・インフレーションとの対比において検討、最後に第15章結論において全体を要約し、付するに終戦後における法幣の崩壊と人民券の統一過程の略述をもってする。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が直接目的とするところは日支戦争中日本の華北占領地における通貨工作史、すなわち、中国連合準備銀行券の発行とその消滅の歴史の究明である。しかしながら、この直接の目的を達成するためには、やがて「華中」および「辺区」の通貨事情の究明が要請せられる。そして筆者はその要請に応じている。したがって、本論文は、今次日支戦争における中国通貨史論といってよい。

本論文において、筆者の目的はよく達成されていることを認めることができるが、特に注目し値するともまれる点をあげれば次のごとくである。

1) まず、資料の収集、整理、吟味がよく行われていること。

このことは、由来中国の経済資料は正確なるものを得がたく統計資料等において殊にその甚しきことの嘆声をきくものであるが、それが戦時中の記録にいたっては、破棄ないし散逸の運命に遭うもの多く、

資料難はさらに甚しきを加えている。筆者がそれらの困難を克服してよく、その収集、整理、吟味をするの仕事を果したことは高く評価されねばならない。

2) 次に、資料の利用がみごとになされていること。

何によって、そういうかといえ、複雑微妙な支那経済、その中でも、そのことに甚しきものがある通貨問題、しかもそれが現地華北、辺区および華中の三地域にわたり、連銀券、法幣、辺区券、儲備券、軍票が「まんじ、ともえ」と入り乱れて通貨戦争を展開しており、その複雑、微妙きわまるところを知らぬものがあつた当時の通貨事情を解明して、ほとんどあますところなきに近いものがあるからである。

さらに、通貨が経済現象の集約的表現であり、経済の動きの中心をなす概さえあることを思うとき、この解明はやがて現地当時の経済の明快なる縮図を呈示することを意味するが、この場合、それは、単に結果的にそうになっているのみでなく、筆者はたえずこのことを念頭においていたことを推定することができる。それだけ、本論文の重味が加わり価値が増していることをみとめざるを得ない。

かくて、本論文は、一つの大いなる局面における通貨、経済の実証をなしとげたものであるが、そして、それは、それ自体において類似の研究 —それはきわめて寥々たるものであるが— 中の白眉たるを失わないものであるが、本論文の価値はそれのみに止らない。というのは、かかる実証は自然科学における実験に該当する。およそ実験は、理論に、そのよって、もって立つデータを供し、その発展完成に必要不可欠なものである。しからば、この研究が経済、とくに、貨幣の理論的研究に貴重な貢献をなすものであることは多言を要しないところでなければならない。

ゆえに本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。